

放尿記

大村伸一

私の友人で、数年前に亡くなってしまったKについて書いておこうと思う。

以前、トイレで溺死した男のニュースが、不謹慎だけれども笑い話のようにテレビでも報道されていたことは覚えている人も多いだろう。それが彼だ。あまり名誉な死でもないから、ここでは名前はKということにしておこう。

彼と知り合ったのは、今はもう誰も覚えてはいないある王国が滅亡してから二年ほど後のことだ。彼はめずらしくその王国のことを覚えている人間の一人だった。覚えているだけではなく、その奇妙な国の王家の全貌を明らかにしようとそのときも研究を続けていて、それで私を見つけ出したのだという。

私の仕事部屋であるアパートの一室を訪れた彼は熱心に数年前のことを尋ね続け、終わりの時間が来ると、次回の約束をうまく取り付けて帰っていった。そしてそんなことが半年ばかり続けられた。

何度か会ううちに一緒に酒を飲んだりもして打ち解けてくると、自分ばかり質問していてもなんだからと、ときどき、彼は自分のことを話すようになった。

彼の話はとてもおもしろくて、なるほどあの王国のことを忘れないわけだと納得もしたが、その話はまた別の機会に紹介することにしよう。そんな彼が一度だけ彼自身の体について信じがたい話を打ち明けてくれた。

あまりにもぼかげていたので、聞いたとたん私は笑ってしまったのだが、彼は真顔で本当なのだと言ひ張るから、ついには私も疑って悪かったと思うようになった。

彼が打ち明けたのは複雑な話ではない。実は彼は生まれてからそれまで一度も小便をしたことがないというのだ。

人間の体は、食べ物を食べて、栄養を吸収したら不要なものを排泄する。その排泄を一度もしないなんてありえない話だ。

大便はするという事なので、そのときに水分と一緒に排泄されているということなのではないのかと試してみると、彼はどちらかというと便秘気味であり、汗もほとんどかかないらしい。では、水分をほとんどとらないのかというと、そんなことはなく、来訪したときに出すお茶やコーヒーは残さずに飲むのだし、酒も人並み以上に飲む。

小便をしたことがないからといって、体に不都合があるわけではなくいたって健康なのだから、気にしてはいないのだが、人に話すとけっこう受けるんだと、彼は最後ににやりとして、話をしめくくった。

彼とはそれから会うこともなかったが、彼の死の一週間ほど前に手紙をくれて、一度も小便をしたことがないという彼の体のその後について知らせてくれた。どうも、そのことを誰かに言いたくて仕方がなかったのだろう。

というのも、ついに彼は放尿することができたのだというのだ。

きっかけは、ある映画を見ていて、その主人公が立ち小便をするシーンがあり、それがあまりにも気持ちよさそうだったので、自分もしているような気分になったとたん、映画館の椅子の上で漏らしてしまったというのだ。

生まれて初めての放尿は、彼が想像もしなかったほどの快感で彼の体を震わせた。あまりにも気持ちがよくて、館内に響きわたるような声であえいでしまったのだという。

幸いにも、主人公が立ち小便をするような映画を平日の昼間から見に来る客はいなかったので、恥をかかずにすんだのだがと彼は書き添えていた。

それから、一秒も無駄にしまいと、大慌てで家に帰り、寝る暇もおしんで放尿し続けているのだという。

水をかぶ飲みし、離尿剤をむさぼり食べて小便をし続け、手紙を書いているそのときも、放尿の快楽に溺れているのだという。手紙を出したあとは、放尿し続けることに集中しほかのことは何もできなくなるだろうと、その手紙は結んでいた。

今も、トイレで小便をするたびに、彼のことを思い出し、彼がどれほどの快感とともに死んで

いったのだろうと想像すると、小便が止まってしまうのだった。